

## 会員紹介：奈良玲子さん

### 私の略歴



短大を卒業後、住友銀行本店営業部外国為替課に2年間勤務。1990年代半ばに国営イラン航空の客室乗務員となり、日本、イラン間を往復する生活を送りながら放送大学で学部、修士課程を修了、専攻は社会学部文化情報科学。15年間の乗務を経て、イラン航空を退職。後、国立テヘラン大学大学院社会学部博士課程に入学。同時に、同大学の外国語外国文学部日本語日本文学科にて教鞭をとり始める。3年間にわたるイラン在住を経て、2015年3月博士号の学位修得。2013年より東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部の講師となり、現在に至る。専門はイスラーム社会学、イラン地域研究。

### 従事した研究・仕事の内容

#### 客室乗務員時代

私がイランと関わり始めたのは1990年代の半ばでした。当時のイランといえばイスラーム革命が勃発してから約20年、イラン・イラク戦争が終結してからは10年程の年月が経っていた時期でした。人々は、まだまだその痛手を払拭できない混沌とした環境の中、日々の生活を送っていたかのように見受けられました。



成田空港にて

そんな時、日本でも一大ブームを起こした日本人女性の一生を描いた「おしん」が、イラン社会に一筋の光を与えたのでした。放送の時間帯になると町に繰り出す人々が半減するといわれる程の人気ぶりでした。革命後に誕生した政教一致社会、その後、8年間も継続された戦争と目まぐるしく変化する社会環境、追い打ちをかけるような、先の見えない万年インフレ経済、失業率の上昇と、厳しい環境の中で日々の暮らしを余儀なくされていた当時のイランの人々が、貧困、厳しい生い立ちにもめげず、自らの手で成功をつかんだ「おしん」に、自らの姿を投影させ、賛同したのだと思われます。

当時、フライトの合間にテヘラン市内を散策していると、頻繁に「おしんの国、日本からいらしたのですか？素晴らしい」と日本人であるというだけで称賛されたものでした。この、「おしん」現象は、その内容が、一般市民に明日への活力を投じたということもさることながら、当時の政教一致社会を確固たるものにしたかったイラン政府にとっても好都合な番組であったのです。即ち、「女性は男性の庇護のもと生涯を送るのが良しとはいえども、家庭を切り盛りし良妻賢母としての役割を果たすべき」という彼らの憲法、民法の源となっているコーランにも記されているような、正に理想の女性像だったからなのです。とはいえ、私の15年間は「耐え忍ぶ良妻賢母」のイメージとはかけ離れた男性顔負けの頭脳明晰な活動的な女性上司、同僚たちに鍛えられる羽目となったのですが。

61.5%。( <http://www.sanjesh.org> ) この数字は2002年、イランにおける大学合格者に占める女子の割合です。13年前の時点で既に男子のそれを上回っていたことになります。このような女性の高学歴化に付随した社会進出、晩婚化、それに伴う少子化現象は、イラン政府にとっても頭の痛い問題に違いありません。しかしながら、統計的にみても、彼女たちは、今後、より一層の邁進を続けるのだと思われます。草食系に移行しつつある男子学生、男性同僚を横目に、そして「おしん」のような女性像を求めるイスラーム的概念とは裏腹に。

## 研究者、教員として

国立テヘラン大学外国語外国文学部日本語日本文学科で3年生向けの漢字の授業を、そして大学付属の語学専門学校で日本語会話、日本社会一般についての授業を持ち始めたのが、教員としてのスタートラインでした。特に、専門学校における2年間の教歴はイランにおける忘れがたい経験の一つです。クラス編成は、約半数が1980年代中旬から90年代前半にかけ、日本での就労経験を持つ中年男性でした。流暢な日本語を話すにも関わらず、読み書きがほとんど出来ないという受講生が大半でした。2年間のカリキュラム終了時に、全員がバランスの良い語学習得できたのか、



テヘラン大学日本語日本文学科のクラス

と問われると、必ずしもそうではなかったのですが、真摯に学ぶ彼らの姿は10代、20代の学生とは一線を画するものでした。頻繁に政治経済の話に脱線するようなこともありましたが、どのような話題に対しても知っている限りの日本語をフルに使いこなし、熱く語り合っていた彼らを、今でも折にふれ懐かしく思い出しています。



社会環境、宗教的な要素に鑑み、思うような学習を修めることが、出来なかった人々が、イランには数多く存在すると思われま。今後、生涯学習の需要は益々、高まるものと推測されます。私自身も現在、非常に興味を持っている分野で、一度、腰を据えて調査にあたりたいと思っています。現在は、東洋学園大学にて、宗教と多文化に関する講義、航空業界への従事を希望する学生向け

テヘラン大学日本語日本文学科の研究室にて 世界の中の日本を視座するリベラル・アーツを軸とした内容を目指しています。

### 仕事上の苦勞と喜び

以前、イラン、日本間の自殺現状の比較調査を行ったことがありました。日本に関するデータはネット上に見切れないといっても良い程、掲載されているのですが、イスラームの教義において、大罪とされている自殺のデータをイランで入手することは、無謀とも思える作業でした。テヘラン大学からの紹介状を手情報相、病院、更には警察署等をまわり、データ収集に努めました。結局、希望する様なデータを手に入することは出来なかったのですが、その代わりに、偶然にもイスラーム社会で活躍する、様々な職種に従事している女性たちと出会うことができました。女性警



官、省庁上層部の女性官僚等、男性社会と思われがちな職場においても彼女たちは健在でした。それどころか、男性職員に指示を与え、颯爽と仕事をこなしていたのです。推測したとおりの結果が得られずに裏切られた時もさることながら、調査を介し、意外性を見出した時、そんな時こそが正に、研究者にとっての醍醐味の一瞬といえるのではないのでしょうか。そして、教員としての更なる喜びとといえ、イラン、日本を問わず、教え子たちの活躍ぶりを目にする時といえるでしょう。特に日本に留学している

テヘラン大学の教え子とご家族 する教え子たちが、各地で、学生生活を満喫している姿を見るのは嬉しいものです。「将来、この中から、イランの政治を担うような人材が生まれるかもしれない」などと一人で想像することが多々あります。彼らの

可能性を信じて疑わない今日この頃です。

## 私の生き方

研究に関して、私が常日頃、モットーとしていることは、質的、量的調査法を用いた、即ち、「客観性をもったデータを得ると同時に、綿密な現地調査を行う」ということです。先にも記述したとおり、イランに関するデータを現地で、然るべき機関から入手するのは至難の業です。が、イラン社会の実情を理解し、広く、多くの人々に知ってもらおうという趣旨を考慮すると、非常に重要なプロセスであると考えられます。そこに、私が、現在までに培ってきた人脈、経験を駆使した情報源を加えれば、論文、講演はもとより、講義にも躍動感が生まれると思う次第です。



2015年11月 放送大学における講演

現在の中東各国、それ以上に世界は、IS問題、シリア国内紛争の終結、更には難民問題の解決へ、と余念がありません。今こそイスラームシーア派大国としてのイランの世界政治力が必要とされている時期なのだと思います。今後も、研究者として世界の中のイランを視座すると同時に、第二の故郷としてのイランを一サポーターとして見つめていきたいと思っています。

この度、SRIDの会員に加えて頂けるとのこと、大変光栄に感じております。また中東に関する勉強会等にも積極的に参加させて頂きたい所存でおります。よろしくご指導下さいますよう、この場を借りてお願い申し上げます。